

特集II 激化する民族紛争

世界史を告発する民族問題

一、「民族の復讐」

私は昨秋から一〇カ月間の予定で、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院に教鞭をとっている。こうしてアメリカ社会を内側から眺める良い機会を得ているのだが、ついにソ連との長い冷戦に勝利したはずのアメリカなのに、クリントン政権下でも経済は一向に改善されず、犯罪は急増し、人種問題や英語を話さないアメリカ人の増加など、マルティ・エスニックな移民国家としての脆弱性が顕著になりつつあるように感じられる。それだけに、いま世界で吹き荒れている民族紛争に対しては、きわめて高い関心が寄せられている。CNNのヘッド・ライン・ニュースをは

じめとして、アメリカのマス・メディアは連日、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでの憎悪と怨恨に充ちた果てしなき民族間殺戮合戦の詳細を精力的に報じている。

もう二〇年以上も以前になるけれど、私もかつて旧ユーゴスラヴィア各地を旅したことがある。特に、アドリア海に面したモンテネグロの中世城壁都市・ドゥブローヴニクの美観は、いまも忘れ難い。当時のユーゴスラヴィアは、東欧のなかでも最も西側に近い国としてアメリカでの評判も大変に良く、ドゥブローヴニクにはアメリカ人観光客が大勢来ていた。そのドゥブローヴニクも、昨年来の内戦でセルビア側に砲撃され、破壊されたという。

よく知られているように、旧ユーゴスラヴィアは、民族のモザイクとも世界の火薬庫ともいわれるバルカン半島の

中嶋 嶺雄

海外事情〔平成5年7・8月号〕目次

特集Ⅱ 激化する民族紛争

世界史を告発する民族問題	……………	中嶋嶺雄	2
ヘルシンキ体制を揺るがすユーゴスラビア紛争	……………	西岡 将	12
アフガニスタンの民族紛争と和平への動き	……………	遠藤義雄	27
*			
中国に根を下ろす朝鮮族	……………	柴田 孝	37
メキシコから視たNAFTAの諸論点	……………	丸谷吉男	54
ケネディ政権とキューバ・ミサイル危機(上)	……………	木村卓司	76
公企業の民営化―背景と実態	……………	石川幸一	92
中国の改革・開放政策と経済成長	……………	中嶋誠一	104
我が祖国チベット回想(4)	……………	ペマ・ギャルポ	118

ニュースレター／ロシア 52／エジプト 53

八〇が率いた好動な一〇世紀の巨魁を
見事にはあつたが、首都サラエボの巷に
多民族国家によつて世界に賞賛された

発火点で今日血みどろの樹立し、
それなのに、これらに賞賛された

多民族国家によつて世界に賞賛された

たか、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

か、脱冷戦的指導者チトーであり、
う説明だけでは、少なくて今日

世界史の発展を促す

協約国は、第一次世界大戦の勝利を
得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

得た理想主義的な高邁な原理主義

「世界史を告発」の基礎を成す国家も消

「世界史を告発」の基礎を成す国家も消

解決できなかった原因の一つがある。
北の重要な原因の二つがある。

ニシテイのせめぎ合い
問題を何ら解決し得なかつたことは、い
れども、それでは、社会主義以外の
は容易なのだろうか。決してそう
族問題の困難さがあるといえ

に当たって、エスニ
はしばしば用いら
ないは「民族」
的な民族問
ニシテ
人

東京
動
然

「ニシテイ」の体制を揺るがすローマン・リット

になじまない広領域として、旧ソ連の国家的統合をつねに
脅かしてきたのであった。二のようなソ連国家の脆弱な本
質をいちやく指摘し、ソ連にとっての危機的な民族
質を鋭く予測していたのは、フランスの文化人類学者
ヌ・カレル・ルダンコース女史であった。
これに対して中国の場合は、約一二億の人
セント以上が漢民族であり、少数民族の居
は国土の五〇―六〇パーセントを占め、
五十余に及ぶ民族は漢民族の強い同
かされてきている。中国が旧ソ連
家の国名にきわめてエスノ・セ
を掲げていることの意味は
このことは、旧ソ連とソ
という問題にも繋が
と伝統にもかかわ
とは決してい
半世紀も経
共産党
民族、

す。世界史
埋められ
た。これ
の第一
の目的
は、ソ
連の
崩壊
を
も
た
す
こ
と
だ
。

世界史を告発する民族問題

中嶋 嶺雄

一、「民族の復讐」

私は昨秋から一〇カ月間の予定で、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院に教鞭をとっている。こうしてアメリカ社会を内側から眺める良い機会を得ているのだが、ついにソ連との長い冷戦に勝利したはずのアメリカなのに、クリントン政権下でも経済は一向に改善されず、犯罪は急増し、人種問題や英語を話さないアメリカ人の増加など、マルティ・エスニックな移民国家としての脆弱性が顕著になりつつあるように感じられる。それだけに、いま世界で吹き荒れている民族紛争に対しては、きわめて高い関心が寄せられている。CNNのヘッド・ライン・ニュースをは

じめとして、アメリカのマス・メディアは連日、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでの憎悪と怨恨に充ちた果てしなき民族間殺戮合戦の詳細を精力的に報じている。

もう二〇年以上も以前になるけれど、私もかつて旧ユーゴスラヴィア各地を旅したことがある。特に、アドリア海に面したモンテネグロの中世城壁都市・ドゥブローヴニクの美観は、いまでも忘れ難い。当時のユーゴスラヴィアは、東欧のなかでも最も西側に近い国としてアメリカでの評判も大変に良く、ドゥブローヴニクにはアメリカ人観光客がセルビア側に砲撃され、破壊されたという。

よく知られているように、旧ユーゴスラヴィアは、民族のモザイクとも世界の火薬庫ともいわれるバルカン半島の

海外事情〔平成5年7・8月号〕目次

特集Ⅱ 激化する民族紛争

世界史を告発する民族問題	……………	中嶋嶺雄	2
ヘルシンキ体制を揺るがすユーゴスラビア紛争	……………	西岡 将	12
アフガニスタンの民族紛争と和平への動き	……………	遠藤義雄	27
*			
中国に根を下ろす朝鮮族	……………	柴田 孝	37
メキシコから見たNAFTAの諸論点	……………	丸谷吉男	54
ケネディ政権とキューバ・ミサイル危機(上)	……………	木村卓司	76
公企業の民営化―背景と実態	……………	石川幸一	92
中国の改革・開放政策と経済成長	……………	中嶋誠一	104
我が祖国チベット回想(4)	……………	ペマ・ギャルポ	118

ニュースレター／ロシア 52／エジプト 53

中心に位置しながら、二〇世紀の巨星チトー（一八九二—一九八〇）が率いた対独バルチザン闘争の勝利を経て独自の社会主義国家を自力で樹立し、現代史に数々の問題を提起してきた。今日血みどろの戦乱の巷と化しているボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都サライェボは、第一次世界大戦の発火点ではあったが、一九八四年には、冬季オリンピックを見事に開催して世界に賞賛された民族文化都市である。それなのに、これらの彩りも鮮やかな過去が、なぜ今日のような悲劇によって贖（あがな）われねばならないのか。

多民族国家ユーゴ建国の父であり、統合のシンボルであったカリスマ的指導者チトー亡きあとの宿命的帰結であるとか、脱冷戦と脱社会主義という今日の世界的潮流のなかで民族的統合の枠組や土台が崩れてしまったからだという説明だけでは、今日あまりにも酷い事態の解明にはならない。少なくともチトー亡きあともユーゴは、十余年にわたってなお連邦国家たり得たし、冷戦と旧ソ連型の社会主義からなかなか離れ遠ざかっていた国であった。

しかもユーゴといえば、スターリン主義的なソ連支配の社会主義世界体制に挑戦したこと知られてきたばかりか、戦後のアジア・アフリカ新興独立諸国のナショナリズムの方向を大きく規定した非同盟主義の提唱者でもあり、また最近のチトー後の時代においてさえも、ユーゴ型のい

わゆる自主管理社会主義を標榜して国際的に注目を集めていた。

しかし、反スターリン主義、非同盟、そして自主管理社会主義といった高邁な原理、つまり民族集団や国民国家のナショナルな枠組を越えるインターナショナルな価値たり得た理想主義も、民族や宗教のきわめてプリミティブ（原初的）な異端者同士の対立がひとたび沸騰点に達して爆発したときには、憎悪と怨恨の悪循環を何ら抑止できないことが証明されてしまった。二〇世紀的理想と思われたそれらのインターナショナルな原理が、対内的な紛争処理の手段とメカニズムにはまったく結びつかない幻影でしかなかった空しさが赤裸々に露呈したのである。

戦争と革命の世紀としての二〇世紀も間もなく終わろうとしているとき、世界史の教訓を一切拒否して生じているボスニア・ヘルツェゴヴィナの今日の悲劇が、一七世紀初頭の三十年戦争のそれを上回ると言わざるを得ない理由は、この点にこそあるといえよう。

では、三十年戦争の死闘がやがてヨーロッパの国民国家体系（European state system）、つまりウエストファリア体制を生み出したように、人類はこの世紀末の「民族の復讐」（アラン・マンク）を乗り越えて、やがて二一世紀には、民族間協調の明るい未来を構築し得るのだろうか。

二、社会主義と民族問題

それにしても、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの事態は、特殊な多民族国家の特別の例外であるのか。それとも、世界のほとんどの国家がマルティ・ナショナルないしはマルティ・エスニックな状態にあるだけに、国民国家がこれから次々に辿るべき一つの先例なのだろうか。

こうした問題意識のもとで、ここではまず、社会主義と民族問題について概観しておこう。よく知られているように、社会主義を追求する立場からは、社会主義国家においてこそ民族問題は解決される、とこれまで強調されつつづけてきた。搾取のない社会主義社会では誰もが平等になり、経済が解放され、人間が「自己疎外」の軛（くびき）から抜け出て真に自由になるからだ、といわれてきたのである。だが現実はこの正反対であった。また、「万国の労働者団結せよ！」のスローガンが示すように、社会主義は国境のないインターナショナルリズムに立脚するといわれながら、中ソ国境紛争や中越国境衝突が証明したように、ここでも現実はずっと逆であった。

「勝利したプロレタリアートは国境にこだわらない」。これはレーニンが提起したテーゼであったが、それは社会主

義体制下では、ゆくゆくは国境もその基礎を成す国家も消えてゆく、というレーニン国家論の「国家の死滅」という『美しき論理』に基づくものであった。

だが実際には、社会主義になってから、国家は死滅するどころかますます強化され、国家という巨大な怪物が大きな醜い顔をして、民衆の生活ばかりか精神をも支配してきたのである。社会主義の生産関係や統治のシステムが発展し確立されるに従って、国家の抑圧機能が弱まり、国家の暴力装置としての側面も消えて、やがて国家は死滅するというレーニンの想定とは逆に、国家がますます甦り、民族は社会主義国家によって解放されるどころか、たえず抑圧されてきたのである。

特に多民族国家内部の少数民族に対して、その抑圧は苛酷であった。旧ソ連においても、中国においても、そうであった。それは、革命の勝利という抗しがたい論理のもとに、ロシア民族や漢民族という支配民族中心の社会主義革命国家が形成され、解放という美名で周辺の少数民族国家を強制的にその版図に加えていったことによってもたらされた結果でもあった。旧ソ連におけるバルト三国や中央アジア、ザカフカースのイスラム諸民族がそうであったし、中国においてはチベットがその典型である。しかもこれらの少数民族による共和国（旧ソ連）や自治区（中国）を中央が

コントロールするため、それら地域の最高指導者はつねにモスクワや北京の中央から派遣される党第一書記もしくは中央に忠誠をつくす傀儡としての少数民族出身者であった。

したがって、社会主義国家における少数民族の自治の尊重というタテマエにもかかわらず、それは実際には「民族の牢獄」だったのであり、この牢獄から抜け出ようとするいかなる動きに対しても、「分裂主義」という断罪がおこなわれた。中国の新疆ウイグル自治区における「東トルキスタン共和国」樹立の動きへの中国当局の対応にも、それは現れている。

民族問題が民族のレヴェルでは解決されないというこのような対内態度は、必然的に社会主義国家の対外態度に反映する。中ソ間、中越間の熾烈な国境衝突に見られたように、そこには国家権力と結びついたむき出しの民族排外主義が表出するのである。

このような国家とその権力が存在する限り、民族問題は解決され得ない。しかも、民族の自治とか自決という課題は、社会主義にとって決して新しい問題ではなかった。レーニンの著作集を読むと、その大部分のページが民族問題に費やされているといっても過言ではない。そしてレーニンは、社会主義革命の一つの大きな目的が、非抑圧民族の

解放であり、民族的差異や、やがては民族語さえもなくなるという諸民族の融合であることをしきりに説いていた。レーニンはまた、一九一六年の有名なテーゼ「社会主義革命と民族自決権」のなかで、諸民族の融合が将来実現するために、その前段階としての民族の分離の自由が不可欠であることを強調し、「民族の分離の自由がおこなわれる過渡期を通じてはじめて諸民族の不可避的な融合に到着できるのである」と述べていた。また、スターリンの有名な論文「マルクス主義と民族問題」（一九二三年）が示すように、民族問題とマルクス主義との関係も大いに論じられ、スターリンがそこで「民族」の成立要件として、言語、地域、経済生活および文化という四つの要素の共通性という定義をおこなったことはよく知られている。

このようにレーニンも、そしてスターリンも、ソ連が多民族国家であっただけに、民族問題には多くの意を用いてきたのであった。そもそも「ソヴェート社会主義共和国連邦」という国名にはいかなる民族名も地域名も冠されなかったことにも、それは反映していた。約二億九〇〇〇万の人口をもつ旧ソ連は、約一億近くが非スラブ系の民族によって占められているだけに、中央アジアからザカフカースに至る「柔らかな下腹部」といわれた地域は、ロシア民族中心の一元的体制、つまりロシア帝国ならぬ「ソ連帝国」

になじまない広領域として、旧ソ連の国家的統合をつねに脅かしてきたのであった。このようなソ連国家の脆弱な体質をいちはやく指摘し、ソ連にとつての危機的な民族問題を鋭く予測していたのは、フランスの文化人類学者エレーヌ・カレルリダンコース女史であった。

これに対して中国の場合は、約一二億の人口の九〇パーセント以上が漢民族であり、少数民族の居住地域は面積では国土の五〇―六〇パーセントを占めるものの、それらの五十余に及ぶ民族は漢民族の強い同化力によってつねに脅かされてきている。中国が旧ソ連と異なつて、社会主義国家の国名にきわめてエスノ・セントリックな地域名「中華」を掲げていることの意味は、決して小さくはないのである。このことは、旧ソ連とは異なる中国社会の共同性・一元性という問題にも繋がっている。だが、そうした中国の歴史と伝統にもかかわらず、そこに存在する国家が永久不変だとは決していえない。中華人民共和国はその形成以来まだ半世紀も経ていないのであつて、しかもこの間、中国では共産党権力がつねに強権を発動してきたにもかかわらず、民族の反乱と抵抗はチベット、新疆ウイグル、内モンゴルなどの自治区で連綿と続いている。

こうして旧ソ連や東欧においても、また中国においても示されているように、社会主義は民族問題を結局は何一つ

解決できなかったのである。ここに社会主義の背理とその敗北の重要な原因の一つがあることはいうまでもない。

三、エスニシティのせめぎ合い

社会主義が民族問題を何ら解決し得なかつたことは、いまや明らかになつたけれども、それでは、社会主義以外の枠組ならば、問題の解決は容易なのだろうか。決してそうではないところに、今日の民族問題の困難さがあるといえよう。

そのような今日の民族問題を論ずるに当たつて、エスニシティ (ethnicity) という用語が最近ではしばしば用いられるようになってきている。そしてエスニシティは、「民族」「種族」および「人種」のいずれにも関わる今日的な民族問題を表現する新しい概念だといえよう。そこでエスニシティを私なりに定義してみると、まず第一に、さまざまな人間集団のなかで他の集団と自らの集団を区別しようとする意識、つまりアイデンティティ (identity) が当然の前提になる。この場合のアイデンティティとは、一種の仲間意識、自分がどの集団に属しているのかという帰属意識だと考えてよいであろう。そうして見てみると、旧ソ連の国民はロシア人、ウクライナ人、あるいはアルメニア人、ウズベッ

ク人そしてバルト三国ではエストニア人、リトワニア人などのアイデンティティはそれぞれが強烈に保持しているのに、どの民族の住民もソ連人というアイデンティティはほとんど稀薄であるか、まったく保持していなかったといえるよう。

旧ソ連の場合、ロシア革命後のソ連邦形成以来、対内的にも対外的にも、あれほど強力に「ソ連 (USSR)」を主張してきたにもかかわらず、肝心のロシア民族を含めて、「ソ連人」というアイデンティティは結局根づかなかったのであり、ここにソ連邦が一九九一年末、一夜にして解体した大きな原因があったといえよう。そして脱冷戦と脱社会主義という世界史の転換期にあって、本源的なアイデンティティへの回帰が各民族共和国内部に一齐に起こったのであった。

もとより、アイデンティティを核とした新しい民族問題は、旧ソ連や東欧ばかりではなく、現在、全世界的に起こっている。たとえば、これからその存在や帰趨がますます重要になると思われる台湾の場合、中国人という意識よりも、自分たちは台湾人 (Taiwanese) なのだという新しいアイデンティティを台湾の人びとは最近強くもちはじめている。台湾は経済的・社会的にも非常に成功しており、政治改革も著しく進捗していて、国際社会での評価も日増し

に高まっている。そうなればなるほど、自分たちは中国とは一緒ではないという意識が育ってくるのである。したがってアイデンティティは、歴史的な本源へ回帰しようとする振り子とともに、新しい社会・経済の状況のなかで、自らを新しく形成しようとするもう一つの振り子を動かそうとする。

シンガポールは、より明白に後者のような状況だといえよう。シンガポールは、人種的には大部分が漢民族、つまり中国人によって構成されているが、この国の国民形成 (nation building) の成功もあって、住民の多くは今日、シンガポール人 (Singaporean) としての意識をもっている。同じ中国人社会でも、香港は大部分が広東人であるが、その経済的活力や社会の発展、そして何よりも一九九七年の香港返還を目前にした緊迫感もあって、彼らは自分たちを香港人 (Hongkonger) だと主張しはじめている。

このように新しいアイデンティティの追求への動きが全世界的に表出しているのであり、それは従来の概念ではとらえられない展開を示している。ここにエスニシティという用語が登場した理由があるともいえよう。

第二に、エスニシティを考える場合の今日的な条件として、それぞれの集団が特定のテリトリー (territory)、つまり領土もしくは領域に立脚していることが重要な意味をも

っている。また同時にこの事実が、エスニシテイのせめぎ合いとしての今日の民族紛争を、容易に和解ないしは調停しがたいものにしているといえよう。

たとえばよくユダヤ人問題といわれるように、ユダヤ人にはユダヤ人としてのアイデンティティが強い。けれどもユダヤ人はイスラエル以外にも全世界に散在しているのであり、したがってユダヤ人問題は、エスニシテイの問題とは一般にはいわない。

これに対して、旧ソ連や東欧の民族問題、たとえばアゼルバイジャンとアルメニアの民族紛争やボスニア・ヘルツェゴヴィナの今日の民族間内戦の場合、それぞれのテリトリーに立脚した民族集団の居住空間が存在し、もしくは複雑に交錯している。そして民族集団の棲み分け (segregations) に関する暗黙の合意が崩れ、摩擦が生じ、エスニシテイのせめぎ合いが始まるのだといえよう。

したがってマルチ・エスニック・ソサイエティといわれるアメリカ合衆国の場合には、アフリカ系アメリカ人、黒人) やネイティブ・アメリカン (インディアン) それに最近急増しつつあるメキシコなどラテンアメリカ系アメリカ人 (ラティノス)、アジア系アメリカ人 (エイジアン) などがさまざまな社会問題を提起しているにもかかわらず、これらのエスニック集団は特定のテリトリーに立脚せず、あちこち

の州に散在しているために、アメリカ合衆国でのエスニシテイの問題は、少なくともこれまでには、旧ソ連や東欧諸国、それに中国などの民族問題とは区別されてきていた。合衆国の住民は等しくアメリカ人としてのアイデンティティを保持し、共通の言語としての英語を話すということにおいても、アメリカ国内における民族問題はこれまで存在しなかったといつてよいであろう。それが理念の共和国としての移民国家・アメリカの特質であった。しかし、このようなアメリカ像が最近大きく揺らぎつつあることも否めない。ラティノスを主として、英語を話さないアメリカ人も増加しつつあり、英語を読めない書けない (illiterate) アメリカ人も増えつつあるという。

そうしたなかで、一九九二年四月のロサンゼルス暴動に示されたように、またこの暴動のきっかけとなった黒人青年殴打事件に対する本年四月の連邦地裁による有罪判決があつたにもかかわらず、アメリカ社会における黒人問題はますます深刻化しつつあるのが現実であり、社会の正論ないしは公論としては、いまや人種差別が世を挙げて排斥されているのに、大都市を中心にして黒人層の棲み分けがより一層進んでいる。⁽¹⁾つまりアメリカ社会においても、テリトリーに立脚したエスニシテイの問題が登場しつつあるのだといえるのではなからうか。

そしてエスニシティに関する第三の条件としては、政治的抑圧の減少、経済生活の向上、情報空間の拡大に伴う社会的枠組のソフト化によって、広い意味での民主化 (Democratization) が全世界的に不可避になりつつあることが挙げられよう。この場合の民主化はしばしば政治的・社会的な混乱や不安定を伴うけれど、歴史の進歩のために、それはもはや避けられない道程だといわねばなるまい。私たちが現在目撃しているのは、まさしくこうした歴史的過程なのだともいえよう。

四、民族を超えて

ところで、エスニシティという表現は、もともとネイションとしての民族ではなく、より人類学的・民族学的な意味での民族に関わっている。そしてそのような学問上の分類からすれば、世界には三千数百のエスニック・グループが存在するとい⁽¹²⁾う。その三千数百の集団に対して、全世界の主権国家もしくは主権地域は約一八〇前後しか存在していない。ここに現代世界の大きな矛盾があるのである。近代の戦争や革命の結果、特に第一次世界大戦と第二次世界大戦および今世紀初頭以来の社会主義革命の結果、今日の国境線が線引きされたのが現代世界の区画であり、日本

などを特殊な例外として、その線引きはいわゆる国民国家 (nation state) の枠組と異なっており、しばしば民族がはみ出したり、強引に吸収されたりしている。こうして三千数百の民族をあえて百数十の枠組に閉じ込めようとしたことの無理が、今日問われているのだともいえよう。そしてこれらの問題の解決こそ、二一世紀に向けての人類の最重要課題にならねばなるまい。

そのためにはどのような方向が模索されるべきであろうか。あるいはこれ以上の悲劇を招来することのないよう、絶対に避けるべき方途はいずれであろうか。

すでに見たように、アメリカが力を喪失して移民国家としての脆さに悩み、旧ソ連がブラック・ホールと化し、イスラム原理主義が各地に興隆し、貧しい諸国の排外主義が強まりつつあるという今日の混沌のなかで、「民族の復讐」を予測したフランスの若き知識人アラン・マンクは、民族主義が時流の環境保護主義やポピュリズムと結びつく「エコロ・ナシオナロ・ポピュリズム」に注意を喚起し、このような潮流がナチズムの再来に繋がりがかねない危険性に強い警告を発している⁽¹³⁾。

マンクの問題提起は一見突拍子もないように思われながら、それがきわめてリアルな認識であることを、最近の日本のある新聞記事が示唆していた。

『朝日新聞』が伝えるところによると、去る三月下旬に東京都内や埼玉県一円に不法残留外国人の国外追放を訴えるポスターが張り出されたというが、それはネオ・ナチ運動を進めている「国家社会主義者同盟」を名のる団体によるものであるという。そしてそのポスターの写真には「自然環境保護」「生態系を守れ」と書かれているのが私には衝撃的だった。ここには極端な排外的ナショナリズムがゆくゆくは「優越民族」「種の保存」といった「ウルトラ・エコロジズム」に帰着するであろうことが示されている。

アラン・マンクは一方で、日独両経済超大国が再び世界を支配するのではないかと危ぶみ、特に日本に対しては、「帝国主義的寡占体制」の再来だと厳しい。この日本観はあまりにも極端だといわねばなるまいが、国際社会における市場経済の拡大や文化の領域での相互の交流と浸透が「民族の復讐」を受容する方向に世界は向かうべきだとの見解は、やはり重要だといえよう。

現代の世界は、民族反乱や民族間紛争の頻発に見られるように、国際社会の分裂や本源回帰の潮流が強まる半面、国際的ないしは民際的な相互依存の潮流もきわめて大きい。そうしたなかで、市場経済や文化とくにビジネス・カルチャーの脱国境的な拡大と浸透は不可避的な方向になりつつある。民族の復讐や反逆は、こうした潮流のなかで徐々

に協調と相互認識の方向に導かれてゆくべきではなからうか。

その場合に欠くことのできないのは、基本的人権と民意の尊重という絶対条件である。それを広い意味での民主化と言い換えてもよいであろう。そして市場経済と民主化は、国家主権の壁や国内政治の拘束を乗り越えた人類の普遍的原理であり、義務であるという認識が全人類的に共有されるとき、民族問題もまたそれぞれの民族自身によって初めて理性的な措置に委ねられ、さまざまなケース・スタディを積み重ねることによって次第に克服されてゆくに違いない。

(なかじまみねお・カリフォルニア大学サンディエゴ校国際関係・太平洋研究大学院客員教授)

●注

(1) 「勝利したプロレタリアートは国境にこだわらない」という表現自体は、筆者による要約であるが、レーニンはこのような見解をしばしば表明していた。たとえば、「デニキンに対する勝利に際してウクライナでの労働者と農民におくる手紙」、大月書店版「レーニン全集」第三〇巻、一九五八年、九四四ページ。

(2) 「国家の死滅」に関しては、拙稿「国家の死滅は可能か」、中嶋嶺雄著『中国像の検証』(中公叢書)、中央公論社、一九七二年、所収、参照。

(3) 山昌之・加々美光行・後藤晃(座談会)「民族問題の現在——旧ソ連・イスラム・中国——」、『神奈川大学評論』第一四号(一九九三年三月三〇日)参照。なお、山内発言を基調としたこの座談会は、今日の世界の民族問題に関して、きわめて深い洞察に富んでいる。フラン

ス革命の市民的価値が民族的なカテゴリーを超えたものでありながら国民国家の形成へと収斂し得たのに対し、社会主義、イスラム、儒教は民族的カテゴリーを超えざるを得ないから国民国家には収斂してゆかない、との主旨の加々美発言も注目しに値する。

また、今日の時代のナショナリズムに関する国際的な討論としては、大阪大学人間科学部・青木保教授主宰の国際シンポジウム「今日のナショナリズム——文化・地域・情報」を中心に編集された「思想」(第82号、一九九三年一月)の特集「ナショナリズム」が有益である。

(4) 中華人民共和国内モンゴル自治区の指導者ウランフ(元國務院副総理)は、その典型だったといえよう。

(5) この名称は、第二次大戦中に、当時新疆を支配した軍閥・盛世才がソ連を後ろ盾にして「東トルキスタン共和国」を樹立しようとしたことに由来する。建国後の中華人民共和国においても、一九五八年六月に起こったウイグル族の反乱に対し、中岡当局は「地方民族主義分子」が「東トルキスタン共和国」建設を企図したと非難していた。以来この名称はほとんど忘れられていたが、一九九〇年四月初旬に新疆ウイグル自治区で起こった反乱について、同四月三日付「新疆日報」は、「東トルキスタン共和国を再興しようとした蜂起である」と報じていた。この反政府運動はトルコに亡命中の首目的カリスマの指導者アイサらの東トルキスタン党に率いられているといえよう。

(6) 大月書店版『レーニン全集』第三巻、一九五七年、一六九ページ。

(7) 「民族」に関するスターリンのこの定義は、当時、決定的な意味をもっていた。この定義によれば、ユダヤ人は地域や経済生活(国内市場)の共通性をもたないで、「民族」ではないとして、ユダヤ人虐待の理論的根拠にされたともいわれたけれど、「民族」に関するスターリンの定義に関しては、「スターリン批判」以後も十分に論議されていないので、改めて再検討する必要がある。

(8) この点についての有益な論考として、下斗米伸夫「ネイション」への長い道——民族にとってソ連邦とは何であったか——、「国際交流」第六号(一九九三年四月三〇日)、参照。

(9) Helene Carrere d'Encausse, *L'Empire eclaire*: La revolte des nations en USSR, Paris, Flammarion, 1978. 邦訳「崩壊した帝国——ソ連における諸民族の反乱——」高橋武智訳、新評論、一九八一年。

(10) このような中国民族の属性と中国における国家的再編の問題については、中嶋領雄著「中国 歴史・社会・国際関係」(中公新書 第一章「中国社会の特質」(中央公論社、一九八二年)および同「国際関係論」(中公新書 第六章「社会主義と民族紛争」(中央公論社、一九九二年))それぞれ参照。

(11) "LOS ANGELES: Is the City of Angeles Going to Hell?" TIME, April 19, 1993. "Race on Campus," U.S. News & World Report, April 19, 1993. それぞれ参照。

(12) この点についてはさしあたり、綾部恒雄「民族」問題とエスニシテ「朝日新聞」一九九一年七月一日付夕刊、参照。

(13) Alain Mine, *La vengeance des nations*, Paris, Editions Grasset & Fasquelle, 1990. 邦訳「民族の復讐——新しい世界観の構想——」山本一郎訳、新評論、一九九三年、第一章「回帰」ほか、参照。

(14) 「朝日新聞」一九九三年四月四日付朝刊。

(15) 「民族の復讐——新しい世界観の構想——」、前掲書、第八章「政治の復活」、参照。

しかし、文化の接触や交流が、民族間の摩擦を強め、文化が戦争を起す、ことも否定し得ない。この点については前掲拙著「国際関係論」第一章および Samuel P. Huntington, "The Coming Clash of Civilization — Or, the West Against the Rest," *The New York Times*, June 6, 1993. それぞれ参照。

ヘルシンキ体制を揺るがすユーゴスラビア紛争

西岡 将

はじめに

世界的規模の戦争は必然的に国際秩序の大変動をもたらす。それまで世界を支配していた旧体制が戦争でエネルギーを使い果たして衰亡し、新しい勢力によって力の空白が埋められる。歴史の舞台ではそうした覇権交代がつねに繰り返されてきた。

二〇世紀だけを見ても第一次世界大戦でロシア、オーストリア・ハンガリー、オスマントルク、ドイツの四つの帝国が倒れ、第二次世界大戦は列強の植民地支配に終止符を打った。その直後に始まった東西冷戦は東西両陣営の間で戦火の応酬こそなかったものの、二つの世界大戦にまさる

とも劣らぬ大変動を引き起こした。米国と覇を競った超大国ソ連が経済に破綻をきたして崩壊し、そのあとに一五の独立国家が誕生したのである。

冷戦終結の余波は世界各地に及び、欧州ではユーゴスラビアとチェコスロバキアの二つの連邦国家が分裂した。ユーゴスラビアもチェコスロバキアも第一次大戦後に生まれた国である。それが解体したということは、ソ連の崩壊を含めて第一次大戦以後の欧州の秩序が清算されたことを意味する。

このような急激な変動は大きな混乱を生み出さずにはおかない。チェコスロバキアのように二つの民族が穏やかに「協議離婚」する例はむしろまれである。チェコスロバキアでは暴力的な手段を好まない国民性に加え、パツラフ・ハ